

## 愛媛の水平社運動に関わった人 徳永参二

松山市・宇和島市



徳永参二

徳永参二は、明治16（1883）年に兵庫県揖<sup>いっとう</sup>東郡（現たつの市）で生まれた。生家は地元屈指の大地主で、父親は中国貿易を営んでいた。

参二は地元の学校を卒業して大阪医専に進学したが、そのころに社会運動に関心を深めていったと思われる。しかし、郷里を襲った大水害のため家運が大きく傾き、やむなく医専を中退し、学生結婚していた妻の実家のある松山に一家で移住した。そして、妻の父が営む商店で働きながら平穏な生活を送っていたが、1920年代になって、露天商のまとめ役的な立場で大勢の人々の面倒をみながら、労働運動に関わっていった。大正12（1923）年には松山無産同盟を結成し、その中心人物となった。

この頃、参二は、松浪彦四郎らの呼びかけに応じて、全国水平社支部の創立に参画した。労働運動に関わっていた参二は、大正12年4月18日の全国水平社支部発足を契機に、松浪らと共に初期の愛媛県の水平社運動をリードしていった。これ以降、参二と松浪は、神輿渡御問題や小学校での差別事件など、県内の様々な問題に取り組むとともに、県内各地の水平社支部の立ち上げに尽力した。また、参二は、支部の設立総会に赴き、政府や民間篤志家のなす部落改善運動は恩恵的・同情的であると指摘したうえで、自らの解放を図る以外に道はないと人々に訴えた。

大正13（1924）年9月20日、愛媛県水平社が主催した全四国水平社大会が、松山市三番町の寿座で開催された。この大会を成功させるため、参二は全身全霊を傾けて準備を進めた。当日は、2000人の参加者が会場につめかけ、参二と松浪らが大会役員を務めるなかで、初めての全四国水平社大会は成功裡に終了した。大正14（1925）年、松浪が愛媛を離れて水平社運動から遠ざかると、彼の双肩にその責任がのしかかってきた。そういった中で参二は、愛媛県水平社の執行委員長と全四国水平社の執行委員長を兼ねて、四国の水平社運動をリードした。

大正14年には、第4回全国水平社大会が開催され、そこで参二は中央委員に選出され、昭和3（1928）年まで務めた。参二は、同年4月、朝鮮の被差別民の解放を目指して創立された<sup>こうへいしゃ</sup>衡平社の第6回大会に、全国水平社代表として参加するなど、中央委員としても活躍した。

この後も、参二は水平社運動や労働運動に関わるなかで、差別の解消や社会的弱者の救済に努めた。そして、昭和10（1935）年9月、宇和島で52年の短い生涯を閉じた。

### 〔参考資料〕

- 宇和島市教育委員会 『生誕100周年を記念して 四国水平社執行委員長徳永参二 ―終焉の地・宇和島から―』  
水平社博物館編 『全国水平社を支えた人びと』